HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソ連期ウズベキスタンにおける社会主義的近代化と女性 : 「シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場」の労働者の事例から
Author(s)	宗野, ふもと
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 1-22
Issue Date	2019-07-31
DOI	10.14943/jacas.15.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88381
Type	article
File Information	JB015_001sono.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究ノート

ソ連期ウズベキスタンにおける社会主義的近代化と女性
──「シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場」の労働者の事例から ──

宗野　ふもと

Ⅰ．はじめに

本稿は、ソヴィエト連邦時代（1922～1991年）のウズベキスタンにおける女性の社会主義的近代化の実態を、ウズベキスタン南部のカシュカダリヤ州シャフリサブズ地区シャフリサブズ市にかつて存在した「シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場」（*Shahrisabz «Hujum» badiiy buyumlar fabrikasi*/u）[1]の元労働者への聞き取り調査と公文書館資料に基づき明らかにする[2]。「シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場」は、1928年の設立当初は生産組合だったが1960年に国営工場に改編された[3]。以下、本稿では生産組合・国営工場の双方を指して「フジュム」と表記する。

フジュムは、イスラーム及び家父長制に基づく「前近代的慣習」から女性を「解放」する目的の下、1928年にシャフリサブズの女性活動家たちにより設立された。最初は、「ドゥッピ」（*duppi*/u）という刺繍入りの縁なし帽子を生産する15名程の小さな組織だった。しかし、活動家の勧誘、第二次世界大戦中の男性の出征に伴う女性の労働参加、1960年代に本格化する機械化によりフジュムは規模を拡大し、1980年代半ばには2千人以上の労働者を擁する大工場となった（図1）。

しかし、1991年にソ連が解体すると状況は一変した。フジュムは、材料確保や機械修繕の困難に直面し2005年に倒産したのである。だが、フジュムが培った技術や人間関係は維持された。元労働者は年金を元手に元労働者同士で互助講を開催し、失業、社会保障の縮小、継続的なインフレなどの不安定な生活を凌いだ。また、観光客向けの土産物を生産する工房

(1) 以下、ロシア語の単語は“r”、ウズベク語の単語は“u”を付す。

(2) 本稿は、宗野［2017］を元に2017年9、10月、2019年5月のフィールド調査の成果と考察を加えたものである。

(3) 手工業の生産組合（*artel'*/r）は家内工業者の共同経営組織である。1920～30年代に家内工業の計画経済への引き込みを目的とし設立された。国から支給された材料を用いて生産活動を行い国が生産物を買い取る。得られた利益は組合員間で分配される［奥田 1977］。国営工場はすべての生産手段が国有化された組織で、国の生産計画に則り生産活動を行い、労働者には国から給与が支給される。

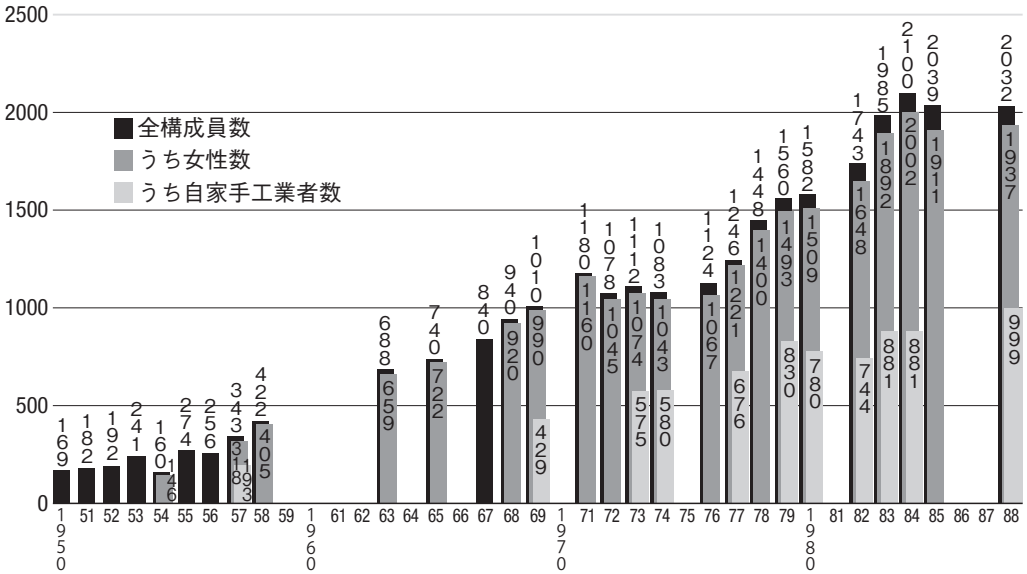

図１　フジュム構成員数の変遷（1950～1988年）

QVShTDA f. 44“Shahrisabz tumani‘Hujum’badiiy buyumlar fabrikasi”を元に筆者作成。

を立上げ、手工芸生産の新たな局面を創り出す元労働者もいた。

現在のシャフリサブズにおける手工芸生産の礎となり、元労働者の生活を今も支えるフジュムはいかなる組織だったのか。フジュムで女性はいかに働いていたのか。以下では、ソ連時代の女性に対する近代化政策を概観したのち、女性に関する先行研究と社会主義的近代化に関する人類学的研究を挙げ、本稿の視座を示す。次に、フジュムの組織的変遷と元労働者の労働経験をフィールド調査で得られた資料に基づき明らかにする。最後に、フジュムの元労働者にとって社会主義的近代化とはどのような経験だったのかを考察する。

１．ソ連期ウズベキスタンにおける女性に対する近代化政策の系譜

20世紀初頭の中央アジア定住地域における一般的な女性の生活は、家庭で家事・育児や手工芸生産に従事するというものだった。稀に外出する際には、「パランジ」（*paranji*/u）と「チャチヴォン」（*chachvon*/u）という全身を覆うヴェールを着用した。結婚は12歳頃で、相手は両親が決めるもので、縁談が成立すると婚資（*qalin*/u）が婿側の両親から嫁側の両親に支払われた。一夫多妻婚も見られた。家族は、年長男性が家族の行動を管理する家父長制家族が一般的であった。嫁いだ女性は、夫や舅姑の世話をし、男児を産むことが強く期待され、これに沿えない場合は一方的に離婚されることもあった。当時この地を訪れたロシア人は、女性がこの状況をいかに捉えているかどうかに関わらず、イスラームや家父長制的慣習の下で「不幸な」生活を送る女性を、中央アジア定住社会の「後進性」や「抑圧性」の象徴として

批判的に捉えた［帯谷 2016］。

1917年の十月革命を機に、ソヴィエト政権は、女性参政権、離婚の自由、男女同一賃金など男女平等に関する法整備を先進諸国に先んじて実施した。1919年には、男女平等を実現すべく共産党の一部門である女性部（*Zhenskii otdel*/r, 通称 *Zhenotdel*/r）を設立し「女性解放運動」を開始した。ソヴィエト政権は、早婚、婚資の授受、一夫多妻婚の慣習がある中央アジア定住社会の女性は、他地域の女性よりも抑圧されており、これらの「前近代的慣習」から女性を「解放」することを重要な課題とみなした。女性部主導で、女性の権利をめぐる討論会、法律相談、識字教室などの草の根的啓蒙活動や、家事労働の社会化が各地で行われた。女性の経済的自立を実現するために、絨毯、刺繍、乳製品の生産組合が設立された。

スターリンが重工業化と農業集団化に舵を切ったことは、女性解放の理想主義的色合いを変えていく。1927年に実施された反ヴェール運動では、女性を抑圧する封建的諸関係に「攻撃（*hujum*/u）」（フジュム）を仕掛けることが宣伝された。本稿の対象である「シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場」の名称は、これにちなんでいる。だが、反ヴェール運動の真の目的は、社会主義建設の障害であるイスラームの弱体化と女性労働力の確保にあったといわれる［Massell 1974］。

1928年に始まる全面的集団化以降は、女性解放とは、女性が労働者になり産業化に貢献することだと宣伝されるようになった。1930年には、「女性問題は解決した」と突如発表され女性部も解散した。1920年代後半に始まる女性に対する近代化事業は、前時代における政治、経済、文化領域における男女平等を目指すものではなく、五か年計画達成のために実施されたといえる［Buckley 1989: 128］。その一方で、労働者の夫を家庭で支える妻も産業化に貢献すると称賛されるようになり、女性は家庭と社会において活躍することが期待されるようになった。

女性の社会進出は、出征した男性に代わり女性が働く必要が生じた第二次世界大戦中に進んだ。村落部の女性はコルホーズ員やソフホーズ員として農業に従事し、都市部の女性は繊維工場の工員、教員、医療従事者などとして働くようになった。1950年の統計では、ウズベキスタン全労働者に占める女性の割合は40パーセントであることからも、少なくない女性が労働者になっていた［五十嵐 2009: 21］。しかし、ウズベキスタンの女性活動家トフタホジャエヴァが、綿花畑に散布される殺虫剤が原因で悪性腫瘍を患いながらも労働英雄として称賛された女性、薄給の集団農場で働きながら家庭では「革命前」と同じように家族の世話に明け暮れた女性を挙げるように、女性の社会進出は多くの矛盾をはらんでいた［Tokhtakhodjaeva 1995: 111–114］。

1953年に始まるフルシチョフ体制の「脱スターリン主義」によって、女性の政治参加の必要性が再認識された。1920年代前半のような女性解放運動は実施されなかったが、なぜ女

性は政治活動をしないのかという問いが生じ、女性の二重負担の顕在化、家事・育児の社会サービスの有効性に疑問符が付された［Buckley 1989: 159］。続くブレジネフ時代には、「女性問題は解決されていない」と宣言され、女性の就労促進、女性管理職の増加、職種の偏り解消の試みがされた。一方で、当時全ソ連的に深刻化していた出生率低下、経済成長鈍化、労働力不足を解決するため、女性は家外で労働しつつ子供を産み育てる役割を持つとされ、社会サービスの充実化、パートタイム労働の導入などが検討されたが、その成果は不十分だった［Buckley 1989: 168］。一方、ウズベキスタンでは人口増加に伴う過剰労働力が生じ、全ソ連的な出生率低下や労働力不足とは状況を異にしていた。しかし、「女性問題は解決されていない」という公式見解の下、伝統的なジェンダー規範が未だ女性に影響力を持つことへの批判や、女性の社会進出の重要性が強調された［Constantine 2001: 142–150］。こうした状況は、家庭における女性の役割の固定化と二重負担の維持につながった。

ゴルバチョフによって断行されたペレストロイカは、人工妊娠中絶や売春など、1930年代以降、公的な出版物では取り上げられなかった女性問題を議論する機会を開いた［Buckley 1989: 191］。さらに、男性も家事・育児をすべきという主張も現れ、スターリン以来当然として受け入れられてきた、女性と家庭のつながりに疑問が投げかけられた。しかし、公式見解にとらわれない自由な言論活動は、皮肉にも経済立て直しのために断行された経済合理化と相まって、家事・育児ゆえに男性のように働けない女性は、本来の居場所である家庭に戻るべきという主張を生み出していった。この論調は、1991年のソ連解体後における女性の高失業率の一因となり、こうした伝統回帰志向は、ウズベキスタン独立後のナショナリズムと結びつき強化されていく。

2．女性は解放されたのか：先行研究と本稿の視座

女性に対する近代化事業は、先行研究ではいかに評価されているのか。その論点は、ソ連時代ならびにソ連解体以後に行われた研究に大別できる。

●ソ連時代の研究

スターリンの「女性問題は解決済み」という宣言は、社会主義イデオロギーの正当化を使命とするソ連の学術状況において、男女の格差問題を正面から取り上げることを困難にさせた。研究者の目的は、就労促進、教育普及、反ヴェール運動が女性を解放した／しつつあるという、社会主義の成果をアピールすることにあった［Aminova 1977］。多くの女性が革命後に共産党員になったこと、反ヴェール運動では封建的遺物が一掃され、女性は男性と同等に働くようになったことが示され［Bikzhanova, Zadykhina, i Sukhareva 1962: 326–327］、ソ連経済のさらなる発展のため、家庭にいる女性を社会的生産活動に巻き込むことや女性労働者

の生産効率向上の方策が議論された［Ubaidullaeva 1969］。

ソ連研究者とは異なる主張をしたのが西側諸国の研究者である。Massell［1974］は、女性解放の目的は女性を労働力として動員し社会主義建設を進めることにあり、女性の自立や男女平等は建前だと主張した。Lubin［1981］は統計データに基づき、中央アジア女性の教育及び就労機会は拡大したが、女性は非熟練の職に就き、高等教育における退学率が高い傾向にあることを示した。そして、中央アジアでは男女平等は達成されていないと主張した。Tolmacheva［1993］は、イスラーム信仰実践は女性が行う傾向にあり、家庭ではイスラームに基づく男女のあり方が維持されていると論じた。

ソ連時代の女性に関する研究の多くは、女性は解放されたか否かを論じたものである。これらの研究から、ソ連時代に女性に対する教育普及、就労促進、政治参加の試みが行われていたこと、限定的ではあるが教育や労働において女性の地位は向上した一方で、女性や家族に関する伝統的な規範は維持されていたことが明らかとなった。しかしながら、イデオロギー上の制約や資料アクセスが困難だったことから、女性の社会主義的近代化の実態は明らかにされなかった。

●ソ連解体後の研究

1991年のソ連解体を機に、公文書館資料の利用やインタビュー調査が容易になったことで、外国人研究者の研究が本格化し、ソ連時代の女性解放や女性の経験の解明が進んだ。Kamp［2006］は、1920年代の女性解放思想に共鳴した現地女性の言論活動に注目し、女性解放運動が現地女性によっても支えられていたことを明らかにした。1927年の反ヴェール運動に関して、Northrop［2004］や Edgar［2006］は抵抗活動に着目し、これは当時権力を失いつつあった現地男性による復権のためであったこと、抵抗活動の中で伝統的なジェンダー規範や家族のあり方は、反ソヴィエトの象徴になったことを明らかにした。

スターリン期のヴェール着脱をめぐる「政治」に着目した須田［2011］によれば、女性解放は、そのコミットの程度により現地住民を序列化し差異化するプロセスであった。現地住民は、社会主義的生活様式と価値規範を身に付けているかを監視し合い、「旧習」を維持する人を排除し、排除の恐怖を目の当たりにしながら自己を規律づけたという［須田 2011: 51］。しかし、人々は排除に対する恐怖ゆえに社会主義的生活様式や価値観を妄信したのではなかった。一見模範的な党員だが家庭では「旧習」を維持する男性、国際女性の日が近づいた時だけヴェール廃棄を提案する女性活動家［須田 2011: 43−44］がいたように、不断の差異化プロセスは、人々に社会主義的価値規範と伝統的価値規範の両者の内面化を促したのである。

ソ連時代に、女性が「社会主義」と「伝統」という異なる価値規範を内面化したことは、Constantine［2001］も主張する。彼女は、現地女性が、自らの権利を自覚し政治に参加し、

労働者として社会に貢献し、将来のソ連を支える子供を産み育て、家庭を切り盛りするという「ソヴィエト的女性らしさ」を受け入れたのは、給料や年金という経済的インセンティブと、教育や医療の無料という社会サービスの享受を通して、ソヴィエト政権に依存するようになったからだと述べる。

ソ連時代に人々がいかにして「伝統」と「社会主義」両者を内面化したかについては、人類学的研究においても議論されてきた。クルグズスタンの農村において親族ネットワークの研究を行った吉田［2004］によれば、1920年代後半に行われた農業集団化はウルックという父系出自分節を基盤に実施され、その結果ウルックは制度的に強化されたという。また、ウズベキスタン東部リシトン市の陶業の社会主義的近代化を取り上げた菊田［2005, 2013］の研究も示唆に富む。リシトン市では1930年代後半に生産組合が設立され、陶業は社会主義的生産体制に組み込まれた。しかし、生産は親方を長とする既存の工房単位で行われたために、師弟関係や守護聖者崇敬は維持されたという。これらの研究からは、ソヴィエト政権は、伝統的な社会関係を体制に組み込みながら近代化事業を進めたこと、それゆえに、伝統的な社会関係や価値規範は体制の中で居場所を見つけたことがわかる。この視点に立つと、須田［2009］の言う不断の差異化や、Constantine［2001］の言う経済的インセンティブ及び社会サービスとは異なる、伝統的な社会関係及び価値規範と社会主義を建設する志向との関わりが見えてくる。

フジュムは設立からソ連末期まで構成員の多くは女性で、家事・育児に忙しい女性は自宅で生産活動をすることもできた（第Ⅲ章で後述）。菊田が、社会主義的生産体制への改編がなされても、生産の場で「慣習の再生産」が行われたと指摘するように［菊田 2013: 345］、女性解放を目指したフジュムにおいても、「手工芸生産は女性の仕事」「家事と育児は女性の仕事」という伝統的なジェンダー役割が再生産されていた。社会主義建設という近代化事業がその理念に逆行するような状況をもたらしたのはなぜか。

アブー＝ルゴド［2009］は、女性に対する近代化事業は、女性の役割の変革を目指したのではなく、解放を通して家庭における女性の役割を再定義し強化する側面があったと述べる。河本［2008］も、多子母を叙勲する「母親英雄制度」や女子学生の家庭科必修化などを通して、ソヴィエト政権は家庭における女性の役割に介入していたことを指摘する。アブー＝ルゴドや河本の議論を参考にすれば、ソヴィエト政権は、国家の発展に資する限りにおいてこれを支持した可能性が浮かび上がる。これらの議論を踏まえ、本稿では、社会主義を建設する志向と伝統的な社会規範は対立的な関係にあったのか否かという視点から、ソ連期ウズベキスタンにおける女性の社会主義的近代化の実態を明らかにする。

3．フィールドワークの概要と資料

シャフリサブズ市は、ヒッサール山脈とザラフシャン山脈を望む水資源豊かな地に位置し、人口は約9万人、その多くはウズベク人という地方都市である［Azizxo‘jaev va b. 2005: 26］。ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国が成立した1926年、シャフリサブズはカシュカダリヤ州シャフリサブズ地区の中心地としてソ連行政機構に組み込まれ、州第二の近代都市として機能するようになった。

本稿で依拠する資料は、フジュム元労働者の聞き取り調査、カシュカダリヤ州シャフリサブズ地区国家文書館（QVShTDA）所蔵のフジュムの年次生産計画と報告書、その他関連資料をまとめた「シャフリサブズ地区『フジュム』芸術製品工場」（*Shahrisabz tumani «Hujum» badiiy buyumlar fabrikasi*）（1942～1992年）、新聞などの刊行物である。第Ⅱ章、Ⅲ章で紹介する元労働者の語りは、2010年4月～2011年11月と2017年9～10月の調査、2019年5月の補足調査で収集した。

聞き取り調査はインフォーマントの知人を紹介してもらいながら、元労働者13名（表1）に行った。13名はシャフリサブズ市内に居住し、12名がシャフリサブズ市内、1名（H）が市外出身者だった。聞き取りはウズベク語で30～90分程度行い、筆者一人で行うこともあれば紹介者等が同席することもあった。聞き取りでは、名前、生年、勤続年数、フジュム参加のきっかけ、労働環境（労働形態、給料、施設、社会保障）、フジュムと家庭生活の関わり（家族との家事・育児の分担）について質問した。2010年に調査を始めた頃は、フジュムの情報が不足していたため、フジュムの歴史や労働環境を中心に話してもらった。フジュムの基本情報を得た2011年以降は、インフォーマントには主にフジュムと家庭生活の関わりを話してもらった。2011年と2017年の調査では許可を得て音声を録音した。

聞き取りを行った元労働者はどのような人々か。13名中12名は、10代後半の若い頃に就労した（Fを除く）。その12名のうち9名は義務教育[4]修了後すぐにフジュムに就労した。残り3名のうち2名のEとJは義務教育修学中にフジュムに就労した。彼女らはフジュムの援助を受け高等教育や中等専門教育機関で学び、その後管理職に就いたエリートである。

フジュムを就労先に選んだのは、進学が叶わなかった（I、K、L、M）、他に働くところがなかった（C）という理由が挙げられている。ここから、フジュムは義務教育修了者の就労先だったことがわかる。また、母や祖母が働いていた（B、E）、女性ばかりの職場だった（J）という理由からは、フジュムは女性のための就労先だったこともわかる。

13名中Dを除いた12名はいずれも就労期間が20年～40年程度で、フジュムの労働をもって年金受給資格を得た人々である。退職時の役職は、生産活動のみを行う自家手工業者、後輩指導とノルマ管理を行う職長、管理職的立場の品質管理部門、絨毯部門長、労働者委員会

[4] 10年または11年間の初等教育と中等教育を指す。

表1　聞き取りをしたフジュム元労働者一覧

名前	生年	労働期間	労働年数	聞き取り実施日※1	フジュムに参加したきっかけ	結婚経験※2	結婚後の家族構成	学歴	就労部門※3	自家手工業者	共産党員	就労時の同居家族	退職時の同居家族	家事・育児の負担
A	1922	1940頃～77頃	38年位	2011/10/18(○)	貧しかった	死別	夫、娘(1人)	義務教育	刺繍部門→刺繍部門(職長)			不明	娘、娘婿	不明
B	1938	1956～1981	26年	2011/4/20、10/17(○)、2019/5/20	母と祖母が働いていた	死別	夫、息子(1人)、娘(6人)	義務教育	絨毯部門→絨毯部門(職長)→刺繍部門(部門長)→絨毯部門(部門長)→労働者委員会		共産党員	舅、姑、夫、夫の妹(2人)	夫、息子、息子の嫁、娘(6人)	一人でやった
C	1941	1959～1992	34年	2010/10/10	絨毯織りに興味があった。他に働く場所がなかった	既婚	夫、息子(1人)、娘(2人)	義務教育	絨毯部門→絨毯部門(職長)		共産党員	父、母、兄(2人)、兄嫁(1人)	姑、夫、息子	姑が手伝う
D	1946	1965頃半年ほど	半年	2010/9/20、2019/5/20	夫に教職に就くのを反対された	死別	夫、息子(3人)、娘(4人)	高等教育	ミシン刺繍部門			舅、姑、夫、夫の兄弟(3人)、夫の兄弟の嫁(3人)	就労時と同じ	嫁たちと分担
E	1951	1965～2005頃	41年位	2011/02/10(○)、2017/09/30(○)、2019/5/19	母と祖母が働いていた	離別	夫、息子(2人)、娘(2人)	高等教育	絨毯部門→品質管理部門→工場長→絨毯部門(部門長)		共産党員	父、母、兄弟(4人)	息子、娘	一人でやった
F	1937	1966～1985	20年	2017/9/30	家にいるのが退屈になった	死別	夫、息子(3人)、娘(8人)	義務教育	絨毯部門	自家手工業者(1971頃～)		夫、娘(1人)	夫、息子(1人)、娘(3人)	一人でやった
G	1948	1966～1998	33年	2017/10/2(○)、2019/5/19	ミシン刺繍には興味がなかった	死別	夫、息子(2人)娘(3人)	義務教育	絨毯部門	自家手工業者(1980～)		父、母、兄弟(2人)、姉妹(7人)	夫、息子、息子の嫁、孫	一人でやった
H	1948	1967～1992	26年	2017/9/30(○)、2019/5/20	姑にフジュムで働くよう言われた	死別	夫、息子(4人)娘(4人)	義務教育	ミシン刺繍部門→ミシン刺繍部門(職長)		共産党員	姑、夫、夫の兄弟(2人)、夫の兄弟の嫁(2人)	息子(3人)、息子の嫁(2人)、娘(1人)	嫁たちと分担
I	1950	1969～2000	32年	2017/10/2(○)、2019/5/20	父に進学を反対された	死別	夫、息子(2人)娘(1人)	義務教育	ミシン刺繍部門→ミシン刺繍部門(職長)			父、母、兄、姉妹(2人)	夫、息子(2人)、娘(1人)	母親が手伝う
J	1955	1970～2000	31年	2017/10/2(○)	女性ばかりの職場	離別	夫、息子(1人)	中等専門教育	絨毯部門→ミシン刺繍部門→縫製部門→品質管理部門		共産党員	父、母、姉妹(3人)	息子	一人でやった
K	1959	1976～1998	23年	2011/10/17	進学できなかった	既婚	夫、息子(2人)、娘(3人)	義務教育	ミシン刺繍部門→ミシン刺繍部門(海外輸出部門職長)			父、母、兄弟(2人)、姉妹(2人)	夫、息子(2人)、娘(3人)	夫の妹、夫が手伝う
L	1962	1980～2005頃	26年	2011/10/22、2019/5/21	病気になり進学できなかった	既婚	夫、息子(1人)、娘(3人)	義務教育	ミシン刺繍部門→縫製部門→ミシン刺繍部門→縫製部門	自家手工業者(1985～86、1988～1990)		祖父、父、母、兄弟(3人)、姉妹(5人)	姑、夫、息子、娘(2人)	子供を保育園に預ける
M	1963	1981～2003	23年	2010/10/10、2019/5/20	大学に進学できなかった	既婚	夫、息子(2人)、娘(2人)	義務教育	ミシン刺繍部門→ミシン刺繍部門(職長)			父、母、姉妹(3人)、兄弟(2人)	夫、息子(2人)、息子の嫁(1人)、娘(2人)	子供を保育園に預ける

※1　○は録音　※2　初回聞き取り時　※3（　）内は役職、→は部門及び役職変遷

と差異がある。管理職に就いた3名（B、E、J）は共産党員で、自家手工業者だった3名（F、G、M）は共産党員でない。長期間のフジュムでの労働経験を有する12名は役職に差異があり、そこには共産党員か否かが関係していたことがわかる。

家族生活とフジュムでの労働との関わりは、13名中8名が結婚前に就労し（C、E、G、I、J、K、L、M）、4名が結婚後に就労した（B、D、F、H。なおAは不明）。共通点は結婚後や出産後も働いたことである。家事・育児の負担については、5名が一人でこなした[5]、5名が嫁、姑、母親と分担、2名が子供を保育園に預けた、と答えた。元労働者は、家事・育児の負担の程度に個人差はあるが、フジュムで働きながら家事・育児をこなした。

まとめると、聞き取りを行った元労働者の多くは、義務教育修了後（あるいは修学中）にフジュムに就労し一定期間働き続けた。彼女たちは共産党活動との関わりや家庭の事情により役職に差異はあったが、フジュムでの労働と家事・育児を両立していた。

Ⅱ．フジュムはどのような組織だったのか

本章では、「シャフリサブズ『フジュム』芸術工場50周年の饗宴のための、半世紀の道のりについての工場長の講話」（Shahrisabz “Hujum” badiiy fabrikasining 50 yilligiga bag‘ishlagan taitalari yig‘ilishda korxonasi yarim asrlik yo‘li tog‘risida fabrika direktorining ma’ruzasi）［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 235］を中心とする公文書と元労働者の語りに基づき、フジュム設立と変遷を概観する。演説原稿は、フジュムの女性解放とソ連経済への貢献をアピールするプロパガンダ的内容だが、この資料を読み解くことで、フジュムが公的にどのような組織として位置付けられていたかが明らかになる。

1．フジュム設立と女性解放

中央アジアのオアシス定住社会では、刺繍は、覆い、帷、壁掛け、衣服に施される生活に欠かせない装飾だった。女性は家族のために刺繍を縫った［Chepelevetskaya 1961: 18］。

1928年、7人の女性活動家が刺繍入り民族帽子のドゥッピ生産に特化した生産組合フジュムを設立した［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 3］。ザイニッディノヴァは以下の様に設立の様子を演説する。

> （略）シャフリサブズでは、女性を自由へ解放する歴史は「フジュム」工場の歴史と固く結ばれている。（中略）共産党、ソヴィエト、社会組織の多方面にわたる文化的、政

[5] 一般的に、10歳頃になると女性は家事や育児を手伝うようになる。ゆえに「一人でこなした」と答えても、娘や夫の姉妹が元労働者の手伝いをした可能性はある。

治的成果は、社会主義建設の活動的建設者になった女性が、公衆の面前で根本的な変化を生み出したことである。何千人の女性が次々にパランジを燃やした。彼女たちの中から、女性の自由のための多くの闘争活動が現れた。この活動的な女性たちは、他の女性の間で説得するという偉大な仕事をした。彼女たちは、平等のための社会主義建設に参加した。町では女性のための生産組合の設立が始まった。

1928年の春に設立された芸術製品を生産する生産組合は、女性が働く工場の一つとなった。生産組合には、「フジュム」という名前が与えられた。この名前が与えられたのは驚くべきことではなかった、勿論のこと。この時、女性を自由へ解放することを目の当たりにしていた「フジュム」委員会は勝利し続けていた。「フジュム」生産組合は、町の女性に自由をつくる中心の一つに変わったのだ［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 235: 3–4］。

ここで、ザイニッディノヴァが「何千人の女性が次々にパランジを燃やした」と述べるのは、1927年に開始された反ヴェール運動のことである。第Ⅰ章で触れたように、前近代的諸慣習の根絶を目指し行われた反ヴェール運動の名前を冠した生産組合は、前近代的慣習からの女性の解放を理念に設立された。

設立当初は小規模だったフジュムは、活動家の地道な勧誘活動のおかげで規模を拡大していった［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 235: 4］。1930年代後半にフジュムの経営は軌道に乗る。シャフリサブズ市に隣接するキタブ市及び周辺村落部では支部が設立された［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 235: 5］。1936年には、1973年まで工場長を務めた現地女性モヒニソ・ジャラロヴァ（Mohiniso Jalalova、1910～2003年頃没）が組合長に就任した。元労働者の間で伝わる話として、Eは、ジャラロヴァが女性をフジュムに引き込んだ様子を以下の様に語る(6)。

家で、女性はみんな退屈だったので、ジャラロヴァは女性をフジュムに集めてから、一人ずつ女性を呼び出しました。ジャラロヴァは「お喋りをしながら縫いましょう。歌いながら縫いましょう」と言いました。彼女たちは歌いながら、踊りながら仕事をしました。女性たちは退屈でしょう。こうして、ジャラロヴァは女性を集めていって、フジュムに参加する女性は増えていきました。以前は、フジュムに参加したのは3人でした。それが7人に、10人に、そして30人になりました。

ジャラロヴァが組合長となった経緯は不明だが、元労働者の間では彼女がフジュム発展に最も貢献した人物と認識されている。

1941～1945年の第二次世界大戦はフジュムにも影響を与えた。シャフリサブズでも男性が

(6) 2017年9月30日。

前線に赴き、女性が生計を支えなければならず、多くの女性がフジュムに参加した［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 3］。

２．工場への改編と規模拡大

1960年、フジュム生産組合は国営の「シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場」に改編され、生産部門新設、機械化、労働者増加が本格化した。1958年に422人だった構成員数は工場改編3年後の1963年には688人、新工場への移転が開始された1973年には1,112人、1984年には2,100人に増加した（図1）。構成員の多くは女性で、男性は修理工や染色部門で働いた。1969年の報告書には全構成員1,010名中、高等教育修了者0名、中等専門教育修了者162名、中等教育修了者587名、初等教育修了者261名とある［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 211: 1］。

1960年、絨毯部門と刺繍部門が新設された。1963年にはウズベキスタン初のミシン縫いドゥッピ「スヴェニル」を生産した［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 8］。1977年には絨毯の半数は機械織りとなった［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 9］。当時のフジュムは、絨毯部門、刺繍部門、ミシン刺繍部門、日用衣料を生産する縫製部門、染色部門を有していた［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 122: 8−9］。

機械化は進められたが、輸出、展示のための手仕事も続けられた。1975年のソ連国民経済達成博覧会にはドゥッピ2種類と絨毯が［QVShTDA , f. 44, r. 1, y.j. 167: 1］、1977年にはモスクワの歴史博物館にドゥッピ3種類、チョッキ、絨毯が収蔵され、輸出用のドゥッピ3種類が生産された［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 189: 1］。これらは高い技術を持つ労働者が生産した。製品デザインを手掛ける「創造的グループ（*ijodiy gruppa*/u）」も結成された［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 178: 4］。

３．労働環境

工場の労働時間は、月曜から金曜、8時から17時だった。ミシン刺繍部門では17時～0時の労働時間もあり、Lは1985年に結婚するまで17時～0時の時間帯で働いた。送迎バスがあったので夜遅くても困らなかったという。Bによれば、平日に家庭の事情で出勤できなければ、土日に働くこともできたという。給料は部門ごと設定され、ノルマ分と超過生産分が合わせて支給された。絨毯部門のノルマは一日に35～40センチ織ることで、Cによればノルマ達成は難しくなかったという。給料は「他の仕事と比べて遜色なかった」（K）や、「生活には足りていた。安かったんだ。すべての物が」（B[7]）というように特段悪くなかったようだ。

自家手工業者として在宅で働くこともできた。ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国地場産業省の「民族芸術製品企業における在宅労働の体制に関する指導規定」では、芸術的技術

(7) 2011年4月20日。

を所有する職人を、居住地にいながら社会的生産に巻き込むことを重要な計画目標と定め、民族芸術製品企業が自家手工業者を雇用する権利を認めている［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 118: 1］。図1からは、1969年から1988年にかけて自家手工業者は全労働者の半数近くを占めたことがわかる。

フジュムには食堂、保育所、クラブ、商店、診療所、図書室があった［Qashqadaryo haqiqati 1972: 2］。夜間学校で学びながら働く未成年や未就学者もいた。前者は共産党やコムソモールと関わりを持ち、中等専門教育や高等教育を受ける者も多く［Zaxarov 1979: 35］、工場の幹部候補生だった。休息旅行もあった。週五日制労働が導入された1968年には、ブハラやサマルカンド旅行、映画やコンサート鑑賞が企画され［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 105: 9］、1977年には、313人が保養施設の利用、共和国内や連邦内の旅行をした［QVShTDA, f. 44, r. 1, y.j. 153: 58］。Aは「一番目はレニナバード（筆者注：現ホジャンド）。二番目はコーカンドへ行って、宿舎に泊まって、三番目はアンディジャン、ナマンガンを回って、羊を一頭手に入れて、その後屠って、一晩中踊っていましたよ」と休息旅行の思い出を懐かしむ。ソ連時代に職場の特典で旅行したことは、元労働者から楽しい思い出として語られる。

4．フジュムと女性労働者

フジュムは、女性解放を目指し1928年に設立された。家族のために行っていた手工芸生産は、フジュム設立により、生産活動の対価として国から給料や社会保障の恩恵を受けられる労働となった。また、フジュム製品は国内外で高い評価を受けた。このことは、フジュムは手工芸生産を報酬を得る労働に変えるだけでなく、ソ連の文化水準の高さを内外に示す社会的意義を持つ活動に変えたといえよう。

しかし、元労働者はフジュムを選んだ理由を「女性ばかりが働いていたから」、「父親に進学を反対されたから」と述べた。こうした発言は、フジュムは女性を伝統的な価値規範から完全に解放したわけではなかったことを示す。フジュムの労働により女性は経済力を身に付けたが、むしろフジュムのような女性のための就労先は、労働現場におけるジェンダーの固定化を招いたのである。

Ⅲ．元労働者たち：フジュムで働くことはどのような経験だったのか

本章では、B、E、Gを中心にフジュムの労働経験を紹介する。聞き取りを行った元労働者は概してフジュムの労働生活を懐かしんでいた。これには、元労働者の多くがソ連の生活水準が向上した1960年～1970年代を現役で過ごしたこと、一方で、聞き取り調査を行った2010年、11年、17年頃は、就労難、海外出稼ぎ者の増加、社会保障の縮小、慢性化するイン

フレなど不確実性の高い生活状況にあったことが関連するだろう。

しかし、調査では自らのフジュムでの労働経験を「ソ連時代の女性は本当によく働いた」(E)、「半年かかる研修期間を3か月で終えた」(I)、「刺繍の腕がよかったので海外輸出部門で働いた」(K)、などと誇らしげに話す元労働者を目の当たりにした。そのため筆者は、彼女たちがフジュムの労働を肯定的に語るのは、ソ連時代に対するノスタルジーだけではないと考えるに至った。本章ではB、E、Gの3名を取り上げ、彼女たちの語りから、元労働者がフジュムでの経験を肯定的にとらえるのはなぜかという問いに答えたい。

1．働く母親の体現としてのフジュム労働：Bを中心に

Bは1938年生まれで（2011年調査時点で73才）、1956～1981年（18～43才）にフジュムで働いた。母と祖母が刺繍部門で働いていたのがそのきっかけである。彼女が絨毯織りに参加した時、機械化は進んでおらず、女性4人が2台の織機で作業するのみだったという。フジュム就労後、Bは家々を訪ね未就労の女性に就労を呼び掛けフジュム拡大に尽力した。また、共産党員になったBは、地区の党活動にも積極的に参加するようになった。

Bは1970年に絨毯部門長となった。キタブ地区にある支部とフジュムを行き来し、学校を訪れては学生に絨毯や刺繍の技術を教えた。その後は、工場の労働者委員会に異動し工場長の右腕として働いた。1981年にフジュムを退職したのちは、1995年まで地区共産党委員会の職員を務め、2006年までは地域住民の自治組織であるマハッラ委員会のオクソコル（*oqsokol*/u）[8]を務めた。Bはフジュム発展に尽力するだけでなく、地域社会の発展にも尽くしたキャリアウーマンだった。Bは、労働に対する考えと自身の働きぶりを以下のように語る。

> **筆者：**部門長としてあなたはたくさん働きました。労働者の中には、よく働く人とよく働かない人はいましたか。その違いは何ですか。
>
> **B：**エネルギーのある人は早く習得する。エネルギーのない人は、「ふわーっ」としている人は習得できない。苦労する。違いはとても大きい。私が15メートル織れば、一人は6メートル織る。私は15メートル織っていた。その違いは大きい。エネルギッシュになるためには、自分で面白がらなければならない。努力しなければならない。自分で努力せず、面白がらず、ただ何となく過ごしたら何ができますか。このような人は習得できない。苦労する[9]。

---

(8) マハッラ（*mhalla*/u）はアラビア語を起源とし、歴史的には近隣コミュニティを意味する。現代のウズベキスタンにおけるマハッラ委員会は、地区行政庁の末端組織として行政の補助業務を行う。オクソコルは元来「白髭」を意味する。一般的には共同体の長老を指す語であり、マハッラ委員会議長の職名でもある。

(9) 2011年4月20日。

このように仕事熱心なBだが、現役時代は1人で家事と育児をしたと話す。以下は、女性の家事・育児と家外労働についての発言である[10]。

筆者：私の考えでは、ウズベク人女性は外で働くことよりも、家の仕事をするのが重要なので、他の場所で働くと言えば、大変にはならないのですか。

B：以前はそうだった。いいえ、大変にはならない。例えば私は7人の子供を育てた。働いた。7人の子供は大学卒業の学歴を持つ。私たちは彼らの家をつくり場所をつくった。私は50年働いた。女性は働くことを望めば働く。すべての女性は仕事をすることを望まない。家にいて夫の稼ぎに頼る人もいる。彼女らは少数で多くの女性は働いている。多くの女性は働いて自分を守り⊡⊡⊡[11]働いている。女性は商売人になって働いている。自営業者として働いている。今や女性は、大・小のビジネスをするようになった。多くの女性は仕事をしている。学校で教師となって働く。病院で働いている。オフィスの事務員として働いている。幼稚園、学校、女性たちはたくさん。

筆者：このように働く女性は家の仕事を自分だけでするのですか？

B：自分でもする。手伝う人がいれば手伝う。いなければ自分でする。

筆者：自分ですることはできるのですか。

B：自分でできる。

筆者：家は大きいでしょう。家族も大きいでしょう。

B：お手伝いはいなかった。自分ですべてしました。

筆者：あなたは50年働きました。私にはできません。だから驚いています。

B:いいえ。結婚すれば、やらなければならなくなる。家の仕事をする時間を見つけなさい。夫が帰って来る。料理を作らなければならない。あんたは働いて帰って来る。時間を見つけなさい。夫が来いと言えば⊡⊡⊡、料理を作るんだ。夫が服を洗えと言えば、夜も昼も働きながら、2時間の時間を見つけなさい、服を洗っておく、掃き掃除をする……

筆者：旦那さんは手伝わなかったのですか。

B：いいえ。手伝わない。主人は仕事がない時は手伝っていた。車でリンゴを買ってきたり、氷砂糖を持って来たり。家の外に出て手伝っていた。

Bは、家事に対して「時間を見つける」能動的な姿勢を重視し、女性が家外で働きながら家事・育児をするのは当然と考える。Bが現役だった1960年代は、公共ケータリング、家電製品の導入、保育園の数と質向上が行われたが、これらは不十分に終わり、女性は家事・

(10) 2011年4月20日。

(11) ⊡は不明箇所（以下に同じ）。

育児を担い続けることになった。B もまた、自身で家事と育児を担わざるを得なかったと考えられる。夫は買い出しをした、と B は話す。買い出しは伝統的なジェンダー役割では男性の仕事である。B は、フジュムの模範的労働者でフジュム発展の功労者だった。一方で家庭では、B は夫に付き従い家事と育児を担った。

B は、独立後ウズベキスタンの経済、学術、文化発展の功労者に贈られる名誉勲章（*Shuhrat Medali*/u）を獲得した。2011 年当時は、彼女はマハッラ女性部長をつとめ、ドゥッピ縫いをマハッラの子供に教えていた。B はフジュムの幹部や地区共産党の職員として働き、引退後は地域社会の取りまとめ役をする有力者である。さらに現役時代の彼女は社会的地位を確立しつつ、家庭における伝統的なジェンダー役割を遂行した。B にとってフジュムの労働と家事・育児は不可分の関係にあった。

２．自家手工業者としてのフジュムの労働：G を中心に

G は 1948 年生まれで（2017 年時点で 69 才）、1966 ～ 1998 年（18 ～ 50 才）に絨毯部門で働いた。ミシンの音が苦手だったので絨毯部門に入った。当初、G は工場労働者だったが自宅に織機があったので夜も絨毯を織った。昼夜フジュムのために絨毯を織ったので、給料を多く貰ったという。G は双子の姉をフジュムに誘い一緒に働いた。G は結婚・妊娠を機に自家手工業者として働き始めた。G は自宅で働くようになった理由を以下の様に語る。

> 子供の面倒を見る人がいなかったんです。当時は、40 日の産後休業でした。チッラ[12]が明けてから仕事をしたのです。でも、私は家に織機を買いました。家で織りました。そして、子供の面倒を見ながら家事をしました。当時は、家畜もいたので家畜の面倒も見ます。その合間に絨毯を織っていました。

G は、姑をすでに亡くしており育児の助っ人がいなかったので、育児・家事と家畜の世話をしながら自家手工業者として絨毯を織った。一方で、双子の姉はどのように働いていたのだろうか。

筆者：お姉さんも家で絨毯を織っていたのですか？

G：彼女の姑が子供の面倒を見ました。彼女はフジュムで働きました。家では絨毯は織りませんでした。姑が子供の面倒を見ました。

筆者：面倒を見る人がいなければ……

G：家です。面倒を見る人がいればフジュム工場で働きます。姉の夫は仕事へ行ってい

(12) 出産後 40 日間のこと。この期間は出産後の女性は外出を控えるべきとされる。

ました。彼女も仕事に行っていました。

姉には育児を手伝う姑がいたので、出産後も工場労働者として働き続けた。前章で述べたように、自家手工業者制度は芸術的技術を持つ人を社会的生産に巻き込むことを目的としていた。だが、Gの話からは、フジュムの労働者にとっては、技術の有無よりも家事・育児の援助の有無が、自家手工業者として働くかどうかを左右していたことがわかる。

自家手工業者は待遇で違いはあるのか。主婦だったFは、「家にいるのが退屈になった」ために、1966年に娘を保育園に預けフジュムで働き出したが、5人目の出産を機に自家手工業者になった。F曰く、自家手工業者と工場労働者は給料に差はなく、自宅で働けば子供が手伝うのでよいペースで織ることができたという。

Gは1998年にフジュムを退職した。現在は、年金を受給しながらEの姪Yuの手工芸工房で娘と共に絨毯を織る。Gは年金を受給できること、フジュムで修得した技術を生かし母子共々働き続けられることに対して、「神様のおかげ（*xudoga shukur*/u）」と何度も述べた。Gは年金や絨毯織りの技術を糧に現在の生活を営んでいる。自家手工業者は、フジュム幹部になることはなくもっぱら労働者として生産活動のみに従事した。しかし、給料や年金に差はなかったという。むしろ、家の外に出ることなく給料や年金を享受できる自家手工業者は、家事や育児に忙しい女性にとって魅力的な働き方だったといえる。

3．フジュムの労働に生きがいを見出す：Eを中心に

Eは1951年生まれで（2011年時点で60才）、1965～2005年（14～54才）にフジュムで働いた。母親と祖母がフジュムでドゥッピを作っていたのがフジュムを選んだきっかけである。彼女がフジュムで働こうと考えたとき、就労年齢には達していなかった。だが、ジャラロヴァ工場長の取り計らいで就労できた。Eは夜間学校に行きながらフジュムで働き、卒業後はフジュムの援助を得てタシュケント繊維産業大学で学び、フジュム初の大学卒業者になった。

Eは20代半ばで工場長候補になるほどのエリートだった。しかし、Eの人生は「順風満帆」ではなかった。彼女は大学在学中に胃の病気で学業を中断し、学業に復帰し大学を卒業したのは28歳の時だった。卒業後には兄の紹介で結婚する。Eは、結婚生活とフジュムの関わりを以下の様に語る[13]。

筆者：いつ結婚したのですか？

E：結婚？　78年に結婚しました。大学を卒業して28歳で結婚しました。

---

[13] 2011年2月10日。姪のYu氏（43才）も同席。

筆者：遅くないのですか？[14]

E：遅い。もちろん遅いです。でも、私は学位を取らなければならなかった。結婚すれば続けることができなかった。29歳で出産しました。今は3人の息子と1人の娘がいます。79年に出産しました。78年に結婚して79年に出産しました。

筆者：結婚してもフジュムで……

E：はい。フジュムで働きました。40年間フジュムで働きました。

筆者：ご主人は許したのですか？

E：はい。主人が許しても許さなくても私は働きました。主人は理解しなかった、学ばなかった。

Yu：叔母はとても苦労しました。叔母の夫は理解もなく学歴もない人なんですよ。良い人ではなかった。

E：子供がいたので一緒に住んでいましたが、最後は離婚しました。その後、私はやはり仕事を続けました。私は離婚したことを気にしなかった。なぜなら自分の専門に関心があったから。仕事が好きでなんです。

Yu：もし、工場長の時に叔母に夫がいなければ、叔母はとてもよい生活をしたはずです。叔母の夫は良い人ではなかった。

E曰く、夫は「理解の無い人」だったという。1986年にEは工場長になったが、出産で休業することになった。Eは工場長に復職しようとしたが、夫に反対され部門長として復職した。Eは工場長に戻れなかったことを悔やんでいた。1990年代後半に離婚後、Eはフジュムで54歳まで働き続けた。彼女は、働き続けたことを以下のように語る。

> そうです。働かなければやっていけない。ここでは、困難があったとしても。そのためにも働かなければならない、働くためには力が必要、知識が必要、記憶が必要。皆が働くために。職業を愛すれば、なぜその職業なのかは説明しないでしょう。そうでしょう？この職業を愛した後は、説明できないですよ。やはり、私はまた工場へ来ました。私は、54歳から年金生活をしています。60歳になりました。8年、7年ですか、すでに7年間年金生活をしていますが、頑張っています。姪を手伝わなければならない。ビジネスに関して、彼女の代わりに走らなければならない。

女性にとって、離婚は経済的基盤だけでなく社会的地位を揺るがす。Eは離婚後もフジュムで働き子供を養った。フジュムでの労働は生計を立てるために必要だっただろう。だがそ

(14) ウズベク人女性の初婚年齢は20歳前後なので、筆者はこのような質問をした。

れだけではない。Eは、結婚生活の破綻によって生じる経済的、社会的リスクを、労働に打ち込むことで埋め合わせたのではないだろうか。

Aもまたフジュムに「生きがい」を見出す女性である。彼女はフジュムに参加した当時のことを「1940年は、食べ物がない。小麦を取って、少し落穂を拾って、少しの料理を作って食べるのです。全くの困窮ですよ」と振り返った。彼女にとってフジュムへの参加は、貧困からの脱出だった。「工場で働いたことは幸せなことですか」というEの質問に対して[15]、Aは「はい。私は工場のおかげで、パンを食べられます。工場のおかげで服を着られます。これだけ長い間、工場は私を養ってくれました。私には息子はいません。娘が1人います。私には工場だけです」と答えた。Aは、40年間フジュムで働き、ドゥッピの縫い手として勲章を授与された優秀労働者である。AやEの話から、彼女たちにとって、フジュムの労働で得た学歴や功績は、婚家に仕え男児を産み育てよという家父長制家族におけるあるべき女性像を実現できないという負い目を、覆すものだったのではないだろうか。

Ⅳ．考察

前章で元労働者は三者三様ながら、結婚して子供（男児）を持ち家事と育児を担うという家父長制家族における女性像を意識しながら、フジュムで働いたことが明らかとなった。本章では、家父長制家族におけるあるべき女性像が存続する中で、元労働者たちはいかにソヴィエト的女性らしさを受容したのかを考察する。

ソ連時代の女性は家外労働と家事・育児の二重負担を担ったが、フジュム元労働者の多くも働きながら家事と育児をこなした。Bは、フジュム幹部として女性解放を支持し共産党活動にも積極的に関わる一方、女性が夫の言うことを聞き、家事・育児を担うことを当然視していた。この背景には、1960、70年代は女性の過重負担問題が顕在化し、家事と育児の社会サービス化が行われたがその成果は不十分だったため、Bも家庭と仕事の両者を担わざるを得なかったことがある。また、母親英雄制度や継続的な女性の就労促進により「働く母親」がソ連社会におけるあるべき女性像として提示されたことは、女性が家庭と仕事を担う状況の正当化につながったと考えられる。

Bがフジュムで働きながら共産党活動を行い、家事・育児をこなしたことは、ソヴィエト的「働く母親」の体現であると同時に、家庭における伝統的なジェンダー役割を遂行することでもあった。ゆえに、Bは家事・育児と家外での労働をこなしたことを誇りとし、他の女性もそうするべきだと考える。Bの事例からは、河本［2010］が指摘した、ソヴィエト政権が「家事と育児は女性の役割」という伝統的ジェンダー役割の温存に積極的に介入し、「働

[15] Aの聞き取り調査にはEとその姪Yuも同席した。

く母親」像を生み出していたこと、それを女性が受容していたことがうかがえる。この介入は、アブー＝ルゴド[2009] が指摘するように、伝統的な女性の役割を社会主義の文脈に合わせ再定義し、イデオロギーとして強化するものだった。

従って、女性が家事・育児を担うという点において、女性に対する近代化事業は家父長制におけるあるべき女性像と相反するものではなかった。これは、1920年代に目指された「女性解放」は、1960年代以降は不十分に実施されていたことを示す。

伝統的なジェンダー役割が社会主義の文脈の中で再定義されたことは、ソヴィエト政権が関与しないところで、Gのような家庭にいながらソ連社会と経済に貢献する労働者になるという働き方を生み出した。上述したように、自家手工業者制度は家事・育児中の女性を対象とした制度ではない。だが、フジュムではこの制度の「読み替え」が生じ、家事・育児に忙しい女性のための制度として機能していた。

陶器生産では、社会主義的生産体制への改編後も親方を長とする工房単位の生産活動が行われために、徒弟制度やイスラームの聖者崇敬が維持された［菊田 2005; 2013］。フジュムにおける自家手工業者制度の普及は、Bの事例から見出されたような、社会主義の文脈に合わせたジェンダー役割の再定義とは異なる形で、家父長制家族における女性の役割を温存した。これは、女性は家事・育児を担うべきという認識にとどまらず、EやAの語りから察知される、家父長制家族における女性のあるべき女性像の温存につながったと推測できる。

家父長制家族における女性のライフコースとは、女性は嫁いだ当初は夫、舅、姑に仕えなければならないが、男児を産み育てることで地位を向上させ、最終的には家族や親族内で年長女性として非公式ながら重要な地位に就くというものである［Massell 1974: 395–396］。この認識が温存されたことは、当然ながらそれに沿えない人々を生み出した。Eの事例からは、労働を通して女性のオルタナティブな生き方が出現したことが明らかであった。

結婚生活が破綻したEは、嫁としての役割を果たせず、家族のなかでの地位を向上させることが困難な状況にあった。しかし、Eは大学卒業の学歴を持ち工場長も務めた。またAも男児を産むことが叶わなかったが、フジュムで長年働き優秀な労働者として評価された。彼女たちがフジュムの労働を通して得た功績は、家族や親族関係における不利な立場を相殺し、EやAが「仕事に生きる」ことを可能にしたのである。

フジュムは、前近代的諸慣習から女性を解放するという設立当初の理念とは裏腹に、家父長制家族における女性の役割やあるべき女性像の維持と強化を促した。しかし、その一方で、報酬、名誉、社会保障を伴うフジュムの労働は、伝統に沿えない女性たちに「仕事に生きがいを見出す」という新たな生き方を可能にした。EやAにとって社会主義的近代化とは、家父長制家族におけるあるべき女性の生き方に沿えないことを自覚しながら、それとは異なる生き方を通してアイデンティティを確立するという経験であった。

Ⅴ．おわりに：女性の社会主義的近代化とは何か

ソ連期ウズベキスタンにおける女性に対する社会主義的近代化は、女性解放思想、産業化、伝統的なジェンダー役割が交錯する中で進んだ。それは、菊田［2005; 2013］が明らかにしたように、1920年代にソヴィエト政権が失くそうとした「前近代的」価値観や慣習に支えられながら進められた。「女性は家事と育児をする」という家庭における伝統的な女性の役割にソ連国家への貢献という公的な意義を付与し、温存し、家庭と女性のつながりを強化するものだった。一方で、給料や福利厚生を享受でき、社会的地位を得られるフジュムの労働は、家父長制家族におけるあるべき女性像を体現できない女性に、「労働を通して自らの役割を確立する」というオルタナティブな生き方を可能とした。ソ連期ウズベキスタンにおける女性の社会主義的近代化は、女性と家庭のつながりを再定義し強化する一方で、伝統的な理想像に沿えない女性の自己実現及び自己肯定を可能とする取り組みであった。

参考文献

公文書館資料

QVShTDA: Qashqadaryo viloyati Shahrisabz tumani Davlat arxivi

44-fond “Shahrisabz tumani ‘Hujum’ badiiy buyumlar fabrikasi”

1-ro‘yxat, 105-yig‘ma jild “Plany, plany meropriyatii nadomnogo truda i drugie”

1-ro‘yxat, 118-yig‘ma jild “Akty proverki deyatel'nosti fabriki predstavitel'em ministerstvom mestnoi promyshlennosti UzSSR, akty proverki k kollektivnogo o dogovora za 1972 god”

1-ro‘yxat, 122-yig‘ma jild “Akty proverki deyatel'nosti predstavitel'em ministerstvom mestonoi promyshlennosti i gorraispolkomami za 1973 goda”

1-ro‘yxat, 153-yig‘ma jild “Perspektivnyi svodnyi plan fabriki na 1977-1980 gody”

1-ro‘yxat, 167-yig‘ma jild “Godovoi bukhgalterskii otchyot fabriki za 1978 god”

1-ro‘yxat, 178-yig‘ma jild “Trudovoi raport kollektiva fabriki: ministerstvo mestnoi Shakhrisabzskovo raiona”

1-ro‘yxat, 189-yig‘ma jild “Materialy po provedniyu i provedeniyu itogov cots. Sorevnovaniyu fabriki za 1980 g.”

1-ro‘yxat, 211-yig‘ma jild “1968 yil uchun yillik hisobchilik hisoboti”

1-ro‘yxat, 235-yig‘ma jild “Shahrisabz ‘Hujum’ badiiy fabrikasining 50 yilligiga bag‘ishlagan taitalari yig‘ilishda korxonasi yarim asrlik yo‘li tog’risida fabrika direktorining ma’ruzasi”

定期刊行物

Qashqadaryo haqiqati. 1972. “Yuksalish odimlari,” (avgust 23).

英語文献

Aminova, Rakhima Khodievna. 1977. *The October Revolution and Women’s Liberation in Uzbekistan*, Moscow: “Nauka” Publishing House Central Department of Oriental Literature.

Buckley, Mary. 1989. *Women and Ideology in the Soviet Union*, Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.

Constantine, Elizabeth A. 2001. *Public Discourse and Private Lives: Uzbek Women under Soviet Rule, 1917-1991*, Ann Abor: UMI Dissertation Services.

Edgar, Adrienne. 2006. “Bolshevism, Patriarchy, and the Nation: The Soviet “Emancipation” of Muslim Women in Pan-Islamic Perspective,” *Slavic Review* 65(2), pp. 252-272.

Kamp, Marianne. 2006. *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling Under Communism*, Seattle: University of Washington Press.

Lubin, Nancy. 1981. “Women in Soviet Central Asia: Progress and Contradictions,” *Soviet Studies* 33(2), pp. 182-203.

Massell, Gregory. J. 1974. *The Surrogate Proletariat: Moslem Women and Revolutionary Strategies in Soviet Central Asia, 1919-1929*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.

Northrop, Douglas. 2004. *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.

Tokhtakhodjaeva, Marfua. 1995. *Between the Slogans of Communism and the Laws of Islam*, Lahore: Shirkat Gah Women’s Resource Centre.

Tolmacheva, Marina. A. 1993. “The Muslim Women in Soviet Central Asia,” *Central Asian Survey* 12(4), pp. 531-548.

ロシア語文献

Zaxarov, C. M, X. Xikmatov. 1979. *Shakhrisabz*, Tashkent: Uzbekistan.

Bikzhanova, M. A., K. L. Zadykhina, O. A. Sukhareva. 1962. “Obshchestvennyi i semeinyi byt,” *Narody srednei azii i Kazakhstana*. Pod red. S. P. Tolstova i dr. Moskva: Akademiya Nauk SSSR. S. 314-331.

Ubaidullaeva, R. A. 1969. *Zhenskii trud v sel’skom khozyaistve Uzbekistana*, Tashkent: Izdatel’stvo “FAN” Uzbekskoi SSR.

Chepelevetskaya, G. L. 1961. *Suzani Uzbekistana*, Tashkent: Gosudarstvennoe izdatel’stvo khudozhestvennoi literatury UzSSR.

ウズベク語文献

Azizxo‘jaev, A. va boshqalarga xokazo. 2005. “Shahrisabz,” *O‘zbekiston milliy entsiklopediyasi, 10-jild*. Toshkent: “O‘zbekiston milliy entsiklopediyasi” Davlat ilmiy nashriyoti, B. 26-27.

日本語文献

アブー＝ルゴド、ライラ 2009「フェミニスト的望みとポストコロニアル的状況」ライラ・アブー＝ルゴド編著、後藤絵美他訳『女性をつくりかえるという思想：中東におけるフェミニズムと近代性』東京：明石書店、14–72頁。

五十嵐徳子 2009「旧ソ連の共和国で大量の専業主婦は誕生するのか」『比較経済研究』46（1）、17–34頁。

奥田央 1977「ソビエトの工業化と農民的小工業(1)：クスターリ工業史の決定的段階 1928–1930」『社会科学研究』29（2）、1–90頁。

帯谷知可 2016「中央アジアのムスリム定住民女性とイスラーム・ヴェールに関する帝政ロシアの植民地主義的言説」『西南アジア研究』84、40–54頁。

河本和子 2010「フルシチョフ期のソ連における公私の区分とジェンダー」『国際政治』161、68–81頁。

菊田悠 2005「ソ連期ウズベキスタンにおける陶業の変遷と近代化の点描」『国立民族学博物館研究報告』30（2）、231–278頁。

――― 2013『ウズベキスタンの聖者崇敬：陶器の町とポスト・ソヴィエト時代のイスラーム』東京：風響社。

須田将 2011『スターリン期ウズベキスタンのジェンダー：女性の覆いと差異化の政治』東京：風響社。

宗野ふもと 2017「シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場について：ソ連期ウズベキスタンにおける手工業の集団化と女性の労働」帯谷知可編『社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族１』CIRAS Discussion Paper No. 69、12–22頁。

吉田世津子 2004『中央アジア農村の親族ネットワーク：クルグズスタン・経済移行の人類学』東京：風響社。

（筑波大学人文社会系）